
産女

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

産女

【Nコード】

N13520

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

織田家に仕えるようになった斉藤朔太郎は信長に言われ妖怪退治をすることになった。その妖怪とは。実際に言われている妖怪を調べて書いたお話です。

第一章

産女

車屋朔太郎は織田家に仕官することができた。それまで仕えていた斉藤家が滅び滅ぼした織田家にそのまま仕える形となった。戦国ではよくあることだ。

しかしであった。その彼が新たに主になった織田信長に最初に言われたことはよくあることではなかった。いきなり彼の前に呼ばれこう言われたのだ。

それまでの稲葉山城は岐阜と名前を変えられていた。朔太郎が聞いたところによるとその信長が天下布武を目指しそれで名前を変えさせたというのだ。

「それで岐阜なのか」

「ああ、そうらしいな」

彼と同じく斉藤家からそのまま織田家に仕えることになった同僚が話す。

「今度の殿様はそれで城の名前を変えたらしいな」

「何か凄い話だな」

「しかもな。清洲からその岐阜に移られた」

信長は本拠地を変えたのだ。これまでの本拠地だった清洲城からその岐阜に入ったのだ。つまり尾張から岐阜城のある美濃に入ったのだ。

そしてだ。彼はその信長に呼ばれたのである。

彼の前に連れられるとだ。細面で白い顔の鋭利な顔立ちの男がいた。顔は整っているが険しい。今にも怒り出しそうな顔をしている。身体は細く背は高めだ。座っているがそれでもわかる。その彼が織田信長であった。

信長は彼の姿を見るとだ。すぐにこう言ってきた。

「車屋朔太郎であるな」

「はい」

信長の問いにそのまま答えた。

「左様でございます」

「その方の話は聞いています」

信長はこつも言ってきた。

「それでじゃ」

「はい」

信長は単刀直入に入ってきて朔太郎もそれに応えた。

「そなたにこれからやってもらいたいことがある」

「といいますと」

「すぐに大垣に向かえ」

「大垣にですか」

「そうじゃ。そこに向かえ」

こつ朔太郎に命じられた。

「よいな」

「大垣にですか」

「聞いたところ今大垣の河辺に奇怪な噂がある」

ここで信長の顔がぴくりと動いた。

「何でも川辺に赤子を抱いた女が出て来るそうだ」

「赤子を抱いたですか」

「そうじゃ。それにじゃ」

また話す信長だった。

「その赤子を抱けば恐ろしいことが起こるといっ」

「恐ろしいことがですか」

「抱いて生きた者はおらん」

そうだというのだ。

「抱いていると次第に重くなって潰されてしまふというのじゃ」

「赤子の重さにですか」

「うむ、それを実際に見た者がある。あやかしの類の様じゃな」

「あやかしですか」

「その様な輩を放つてはおけん」

信長の今の言葉は単刀直入であった。

「それでじゃ。あやかしならば退治だよ」

「接写にそのあやかしの退治をですな」

「その通りじゃ。すぐに向かえ」

こう言つてであつた。朔太郎はすぐに大垣に向かうことになった。その大垣に入るとだ。すぐにその長老が来て彼に対して言つてきた。

「ようこそ、これはこれは」

「話は聞いているが」

「左様ですか」

長老は見上げながら言つてきた。朔太郎は大柄である。小柄な老人と比べて四分の一は余計に大きい。それに体格全体がまるで違う。筋肉質でありしかもがっしりとした顔をしている。豪傑そのものの容貌である。

その顔を見てだ。長老はまた言つてきた。

「それでは。夜です」

「夜か」

「その女は夜に出て来ます」

「こう言つのである。」

「夜の川辺に出て来ます」

「夜にな」

「はい、夜遅くに出て来てです」

長老の話は続く。

第二章

「そして赤子を抱く様に言ってくるのです」

「詳しいな。見たのか」

「はい、私もこの目で見ました」

長老は朔太郎に対してこうも話した。

「実際にです」

「それでその女はどういった姿をしているのだ？」

「はい、黒く長い乱れた髪をしております」

長老はまず髪から話した。

「そして顔はです」

「顔は」

「夜の中で蒼ざめておりまるで死んだ者の様です」

「死んだ様にか」

「そして白い服を着ており脚のところが赤く濡れています」

「赤く。ふむ」

朔太郎はそれを聞いてその太い眉をぴくりと動かした。見れば眉だけでなく目も口もだ。全てが大きく武骨なものである。そうした顔であった。

「面妖な姿をしているのだな」

「そして赤子を持っています」

長老はこのことも話した。

「そうした姿をしております」

「そしてその赤子を抱けばだな」

「次第に重くなりそれに潰され殺さえてしまいます」

信長と同じことを話していた。まさに全く同じであった。

そしてだ。長老はまた述べるのだった。

「そういう次第で。今大垣は夜な夜なその女に怯えている次第です」

「それを終わらせる為にわしが遣わされた」

朔太郎は長老が怯えた様子なのを見てこう告げた。

「そういうことだ」

「それではすぐにですか」

「そうじゃ。それが普通の女ならばよい」

言いはしたが自分でそれはないと思っていた。

「しかしあやかしならばじゃ」

「倒して下さいますか」

「そうさせてもらう。それではじゃ」

「はい、夜にです」

長老はまたこのことも話した。

「夜に御願いします」

「わかつている。では昼はじゃ」

「どうされますか？」

「その川辺を見ることにしよう」

少し考える目になったの言葉だった。

「今からな」

「えっ、川辺をですか」

長老はそれを聞いてだ。驚きを隠せなかった。

「そこに行かれるのですか」

「駄目か？それは」

「危ないのでは、それは」

それを聞いてだ。長老はそれを止めようとする。

「何が出て来るかわかりません」

「いや、夜にしか出ないのであるう」

だが朔太郎はそのことを言うのだった。

「そうだな」

「はい、それは」

それはその通りだった。長老もそれは認めて頷いた。

「その通りです」

「では問題ない。今からだ」

「行かれるのですか」

「戦場を見て知っておくことは勝ちへの第一歩だ」

武者らしい言葉であった。彼はこれまでの多くの戦でそれをわかつていたのだ。伊達に今まで生きてきたわけではない。それもあつた。

「ではな。今から行く」

「では私も」

長老もここで言ってきたのだつた。

「御一緒させてもらいます」

「いいのか？恐ろしいのではないのか？」

「お武家様だけを行かせるわけにはいきません」

こう言つてであつた。

「ですから」

「そうか。それではじゃ」

「参りましょう」

「それではな」

こうしてであつた。二人はその川辺に向かつた。その川辺は水は澄み河原も白や青の石が見え実に美しい。だがそこには誰もいなかった。

第三章

「人気はないな」

「女が出るようになってからです」

長老は朔太郎の横から言ってきた。

「それからもう」

「誰も来なくなっただか」

「はい、度胸試しの者が夜に来るだけです」

「そして死んでいくのだな」

「私は心配でついて来たのですが。遠くで見るだけで」

「それで知ったか」

長老が何故女を知ったのか。これでわかった。

「左様か」

「左様です。それで今は昼も誰も寄りなくなりました」

「わかった」

朔太郎はここまで聞いてまた頷いた。

「そういうことならな」

「何かおわかりになりましたか？」

「事情はわかった。それにだ」

朔太郎は今度は川を見ていた。その澄んだ川をだ。

それを見ながらだ。こんなことを言ったのである。

「深いな」

「川がですね」

「そうだ。かなり深い川だな」

川を見ながら鋭い目になっていた。

「この川は」

「それがどうかしたのですか？」

「いや、忍の者等がだ」

武士としてそうした存在を頭の中に入れて考えるのは当然だった。

それで今こんなことを長老に対しても無意識のうちに話すのだった。

「潜むのもだ」

「できますか」

「これだけ澄んでいれば昼は無理だ」

それはわかった。透けて見えるからだ。

「だが。夜ならばだ」

「それもできますか」

「そうだな。できるな」

こんな話をしながら水面を見ているとだ。朔太郎は不意にその水面に何かを見た。それは。

「むっ!？」

「どうかされましたか？」

「いや、あれはだ」

川の中にある岩の陰にだ。あるものを見たのである。それは尻尾だった。

「あれは牛のものか」

「牛の？」

「長老、ここには前からおかしな話はないか」

真剣な顔を彼に向けての問いだった。

「それはないか」

「その女の話だけです」

「そうだな。その女だな」

「はい、そうです」

「川に牛となるとだ」

だがここで朔太郎はだ。女ではなくこのことを言ってである。そうしてそのうえでまた長老に対してそのうえでまた言ってみせたのであった。

「しかも女までくるとなると」

「何かおありですか」

「いや、わかった」

わかつたというだけであつた。

「この話女だけではないな」

「女だけではないといえますと」

「これは用心してかからなければならん」

今度の言葉は眉を曇らせてのものだつた。

「何としてもな」

「仰る意味がわかりませんが」

「今夜になればわかる。だが」

「だが？」

「この話思つた以上に容易な話ではない」

そしてこつちも言つたのだつた。

「だがこれも殿の御命令。達さなければな」

「何はともあれ今夜ですね」

長老は怪訝な顔になりながらも朔太郎に問うた。

「そうですね。今夜ですね」

「そつちだ、今夜だ」

また言う彼だつた。

第四章

「今夜またここに来る」

「わかりました、それでは今は」

「腹ごしらえでもしよう。今夜は大勝負だ」

こう言つて長老を従えてその川辺を後にした。二人が去つた後その川の岩陰の水が不意に濁つた。それまで澄み切っていたというのにそこだけが不意に濁つたのである。面妖なことだ。

その夜だ。朔太郎はその川辺に来た。昼とはうつて変わつて真つ暗闇であり何も見えはしない。隣にいる長老の姿も見えない。

二人は灯りさえ持つて来ていない。これは女を用心してのことだ。そして朔太郎はその老人に顔を向けてそのうで言つてみせたのだ。

「ではこれからはだ」

「御一人で、ですか」

「戦えるのはわしだけだ。ならば物陰で見えてくれ」

「はい、それではそうさせてもらいます」

「わしに何かあればすぐに逃げるのだ」

「こつちも告げたのだった。」

「よいな、それは」

「はい、それでは」

こうして話は決まつた。長老はすぐに物陰に隠れた。そしてそのうで一人川辺にさらに近付く。闇夜の中にただ川のせせらぎだけが聞こえる。

しかしそれを聴く余裕はなかった。それよりもであった。女が来るかどうかであった。彼は女を待っていた。そしてその他のものもだ。

やがて前から気配がした。そうしてであった。

「もし」

「誰だ？」

「御願いがありません」

こう言つてである。黒く長い乱れた髪に青白い不吉な顔をした女が出て来た。その白い衣は死に装束である。そして腰から足のところから赤く染まつている。夜の中で慣れた目でだ。それも見えてきたのだ。

朔太郎はそうしたものを見ながらまずはいつもの態度を崩さないように努力した。そしてそのうえで女の言葉をありのまま受けるのだった。

「この子をですが」

「その赤子をか」

「はい」

ここでも長老の言葉通りだった。女はその手に赤子を抱いていた。そしてその赤子を彼に差し出してだ。そのうえで言つてきたのである。

「抱いて下さいませんか」

「それだけでよいのだな」

「そうです」

ここでも長老の言葉通りであった。

「御願いができますか」

「よかるう」

どうなるかはわかつていた。だが彼はそれでもそれを引き受けた。そうして女が差し出したその赤子を抱く。最初は何もなかった。

だが徐々に重くなりだ。岩の様な重さから鉄の如くになつてだ。

朔太郎の強力をもつてしても持つていることが容易ではなくなつてきた。

「尊以上だな、これは」

女はそれを見て笑っている。それは楽しむ笑みだ。

まるで彼が死にいくのを待つているかの様にだ。だが彼は耐えていた。

持ち続ける。そうしてである。

どれだけ持ったかわからない。赤子は重くなる一方だ。だが彼は何とか持ち続けていた。しかしここで川辺から何か音がしてきた。それは自ら大きなものが勢いよく出る音だった。彼はその音を聴いてだ。すぐに身体をそちらに向けてである。そのうえでそちらに前蹴りを入れた。

「ぐっ!？」

「来たか、やはり」

闇夜の中に異形の姿が見えた。身体は逞しい、朔太郎程の大男でありその身体は牛のものだ。その異形の存在がそこにいた。

それは彼の蹴りを腹に受けて思いきり倒れ込んだ。だがすぐに起き上がってまた彼に襲い掛かって来た。しかしそれもであった。

彼はまた蹴りを放った。だがそれは先程の蹴りとは違っていた。

脚を一旦大きく振り上げてだ。そのうえで下に鉈の如く振り下ろす。そうしてその化け物の脳天に踵から一撃を浴びせたのである。

それで化け物の動きは止まった。闇夜の中にその目が白目を剥くのがわかる。そしてそのうえで鈍い音を立てて沈んだのだった。

「終わったな、まずは」

化け物を倒して次にはだ。女を見る。すると女はその姿を急に消していつていた。それはまるで煙が消えていくようにだ。消えながら苦悶の表情を浮かべていた。

女が消えると赤子も消えていた。彼はこうして自由の身になった。ここで長老が慌てて出て来て彼のところに来た。そしてそのうえで問うのであった。

「一体何が出て来たのですか!？」

「これだが」

朔太郎はその彼に倒れている化け物を指差して告げた。見ればそれは前のめりに倒れ口から血をふいている。ことごとくしているのは間違いない。

「わかるか」

「牛鬼ですか」

「ふむ、知っているか」

「話には聞いたことがあります」

長老は彼に静かに答えた。

第五章

「川の中に潜み人を襲う化け物ですね」

「そうだ、まさか美濃にまでいるとはな」

「私もはじめて見ました。まさかこの大垣にいるとは」

「これよ。話の元は牛鬼だったのだ」

「ではあの女は」

「産女だな。牛鬼の手下だった」

「産女ですか」

長老はその名前を聞いてだ。また言ってきたのであった。

「それも名前だけは聞いていました。そういえばまさにそれですね」

「それも大垣にいるとは思わなかったのだな」

「はい、まさかと思っていました」

まさにそうだったというのだ。

「ここにいるとは」

「わしも聞いたことがなかった」

朔太郎もそうだというのだった。

「まさかな。全くな」

「はい、美濃にもいたのですね」

「うむ。しかし産女はだ」

「はい」

「産む時に死んだ女が怨念でなるといふ」

この時代はお産で死ぬ女も多かった。その女が怨念によりなる妖怪なのだ。なお赤子で死ぬ者も多かった。それは戦前までそうだった。

「それではいてもおかしくはないか」

「そうなりますか」

「そして牛鬼もじゃ」

今度は牛鬼について話したのだった。

「川や海の何処にでもいるものじゃ」

「何処にでもですか」

「それならばここにいてもおかしくはない」

こう話すのだった。

「それもじゃ」

「左様ですか」

「そうじゃ。何はともあれじゃ」

「はい」

「牛鬼も産女も退治した」

それは間違いないという。

「これでこの話は終わりじゃな」

「はい、確かに」

長老も朔太郎のその言葉に頷いた。

「それは間違いありません」

「では明日殿の元に戻るとしよう」

こうしてこの話は終わった。朔太郎は牛鬼のその首を取りそれを信長の前に見せた。信長はその鬼の首を見てだ。そのうえで言うのであった。

第六章

「わしは神仏の類は信じぬ」

「はい」

朔太郎は信長のその言葉に応えて頷いた。彼は信長の前に控えている。城内の主の部屋でその信長の謁見を受けているのである。

「それはあやかしの類もじゃ」

「左様ですか」

「今までは信じていなかった」

そうだとするのである。

「しかし今御主はこうして牛鬼の首を持って来た」

「この通り倒しました」

「ならば信じるしかあるまい」

こう言うのである。

「わしはこの目で見たのだからな」

「だからですか」

「左様、わしは今鬼の首を見た」

牛鬼の首をだ。それは間違いないのだという。

「だからこそ信じる」

「わかりました」

「そうか。あやかしもまた民を害するか」

そして信長はこうも言ってきたのだった。

「ならばそうしたあやかしは成敗していかねばな」

「成敗ですか」

「そうじゃ、民を害するならばじゃ」

信長の言葉は強いものだった。

「ならば成敗せねばならん」

「民を害するならば」

「左様、わしはただこうして城でふんぞり返っているわけにはいか

ぬ

そのかん高い声で語る。そして顔は真剣そのものだった。

「民をおろそかにしては国は成り立つものではないな」

「はい、それは」

朔太郎も信長のその言葉に頷く。

「その通りです」

「そうじゃな。民は国じゃ」

信長はこつも話した。

「だからこそじゃ」

「ではだからこそですか」

「そうじゃ。そうしたあやかしはこれから成敗する」

その言葉は強い。確かなものであった。

「そして」

「そして？」

「いざとなればわしも行く」

「殿もですか」

「戦場に出るのと同じじゃ」

「同じですか」

「左様、同じじゃ」

そつだという信長だった。

「戦もあやかしを成敗するのじゃ。戦は天下の為」

「天下のですか」

「わしは天下を統一しこの日の本の国に太平をもたらす」

それが信長の望みだった。確かに天下人になろうという野心はある。だがそれだけではなかった。むしろそれ以上に国、即ち民のことを考えていたのだ。それが織田信長という男であった。

「その民を害するあやかしを成敗するの当然であろう」

「殿御自らもですか」

「そうじゃ。わしもまた弓に槍を取る」

どちらも信長の得意なものだ。他に馬術と水練も得意としている。

「いざとなれば素手でも戦ってみせようぞ」

「殿はそう仰いますか」

「無論、わしとていくさ人よ」

語るその顔がさらに真剣なものになった。

「それも当然よ」

「わかりました」

朔太郎はその言葉を受けた。それ以外のものも。

そしてそのうえでだ。こう信長に言ったのである。

「では殿」

「うむ」

「この朔太郎、これからもあやかしを」

「成敗していくのだな」

「無論戦の場でも」

そのことも忘れてはいなかった。武士として。

「存分に活躍して見せましよう、殿の為に」

「その言葉二言はないな」

「はい」

しかと返した言葉だった。

「ですから」

「わかった。ではこれからも頼むぞ」

「しかと」

「天下の為にその力思う存分使うがいい」

これが信長の彼への言葉だった。朔太郎は褒美を得たがそれ以上のもも授かったのだった。これ以降も彼は信長、そして天下の為に働いた。あやかしを倒し戦の場を駆け巡った。彼の名は今も古今無双の豪傑として残っている。だが彼が信長に見せた牛鬼の首の行方はわからない。信長はそれを持っていたようであるが本能寺の変の騒動で焼けてしまったらしい。今その首が何処にあるのかは誰も知らない。

産女

完

2
0
1
0
・
4
・
9

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1352o/>

産女

2010年10月8日12時12分発行